



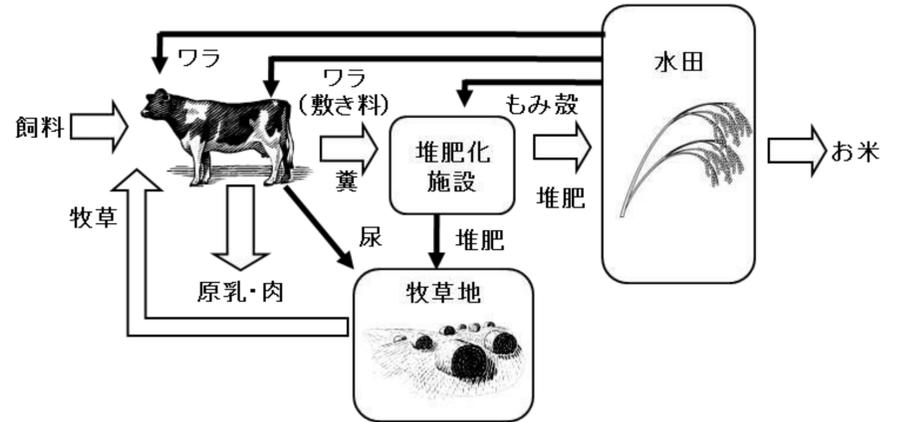
原発事故がバイオマス資源循環に与える影響

佐藤理夫、浅田隆志（物質・エネルギー学系）

循環型社会の構築に向け、県内の豊かなバイオマス資源を活用する技術開発と、普及策の検討を行ってきた。原発事故により広範囲に撒かれた放射性物質が家畜排せつ物の堆肥化に与える影響を、緊急に計測し、考察と提言を行っている。

中通りの堆肥製造施設（本宮市白沢有機センター・大玉村堆肥センター）の放射線量分布を測定した。堆肥からの放射線量は、周辺土壌よりも大幅に低く、昨年製造した堆肥との差もなかった。現状の堆肥は安全であることを示している。堆肥化にはワラやもみ殻が多量に用いられる。汚染されたワラや牧草が混入しないように注意するとともに、秋以降に収穫されるワラなどの放射性物質量を注視する必要がある。

農地を耕さず根の浅い草により表面の放射性物質を吸収する取り組み、農業廃棄物などを炭素化や焼却する際の放射性物質の挙動、油糧作物栽培によるバイオ燃料製造などの研究を開始している。



【畜産と有機米栽培の関係】

糞は堆肥となり、尿は牧草地の窒素源となる。
ワラは敷き料、もみ殻は堆肥化の水分調整剤となる。



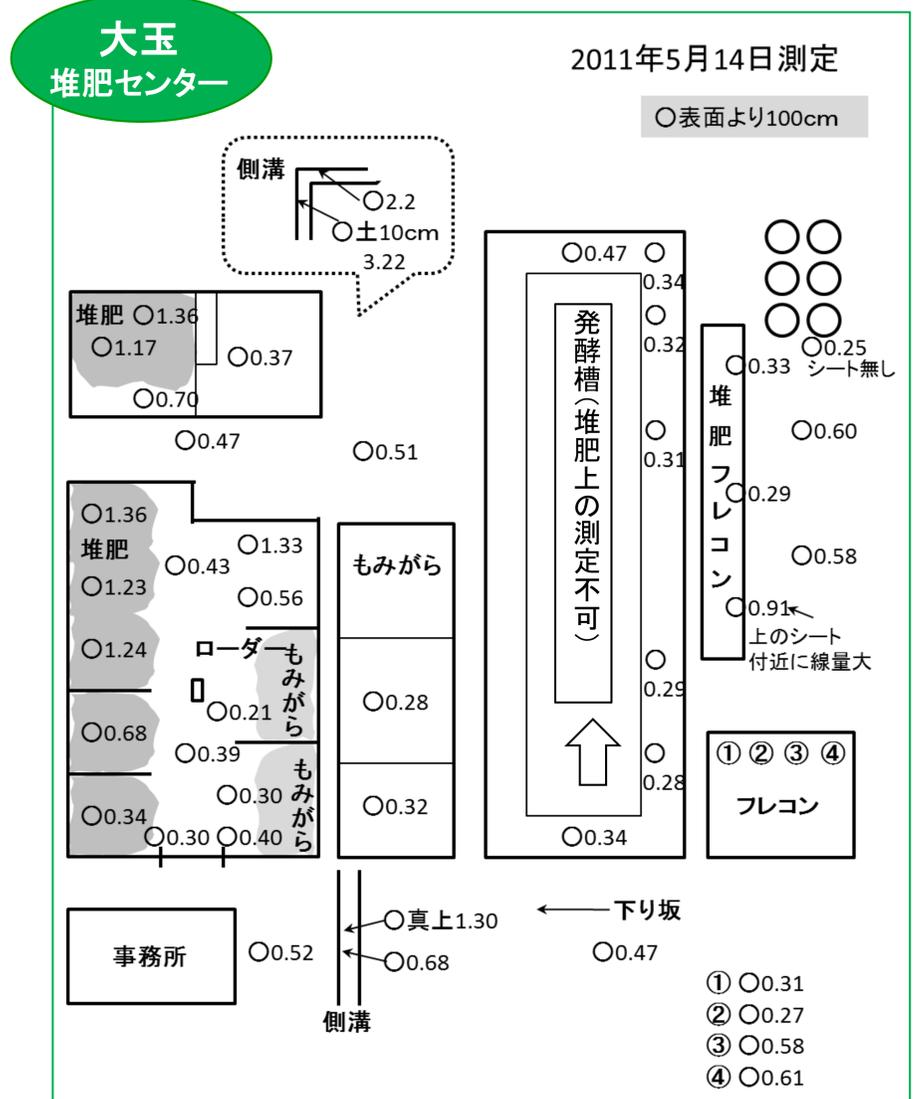
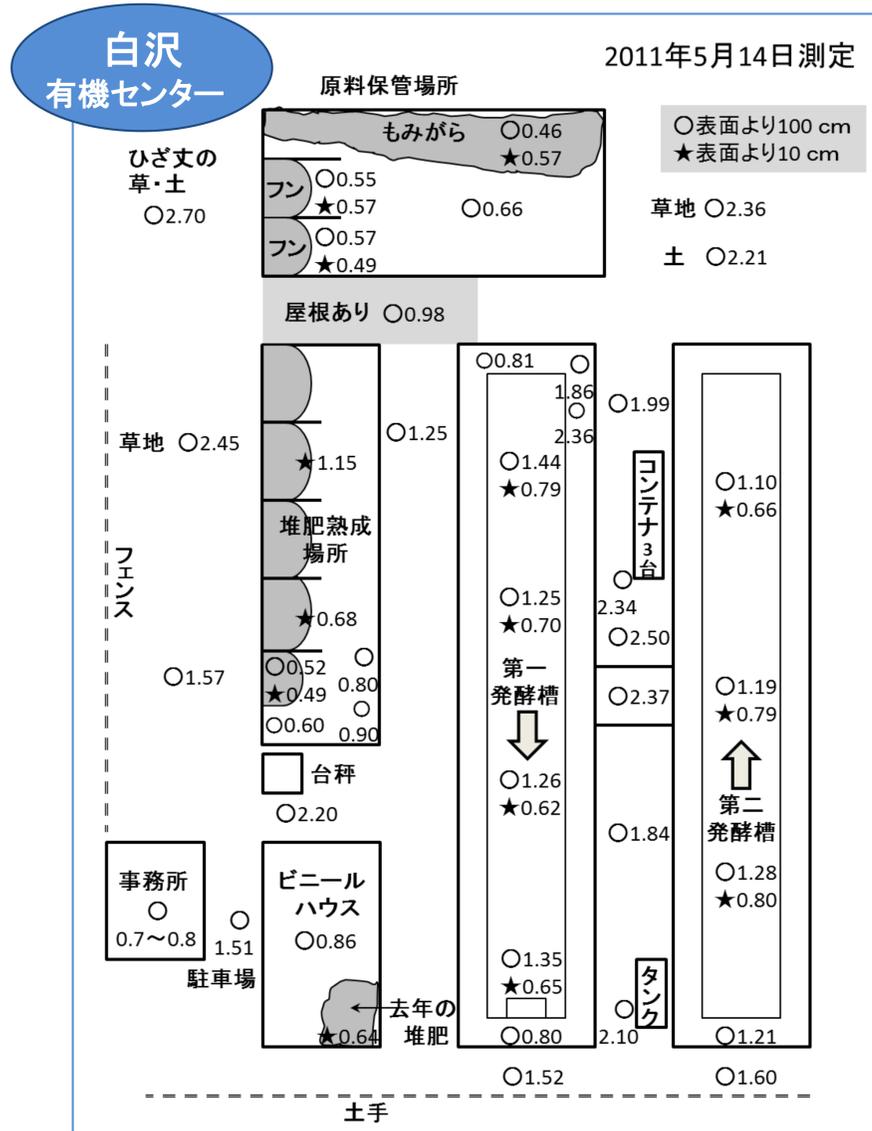
牛舎（牛は屋内で飼育され、主として輸入穀物を食べている）

堆肥原料となる牛糞の山
牛一頭・一日で50kgの糞

堆肥化する際、水分調整に用いるもみ殻

攪拌発酵槽（掻き出すように攪拌する。）

ときどき切り返して熟成させる堆肥の需要期まで保管



【お問い合わせ先】

960-1296 福島市金谷川1 福島大学研究協力課
TEL: 024-548-8009 E-mail: kyoudo@adb.fukushima-u.ac.jp